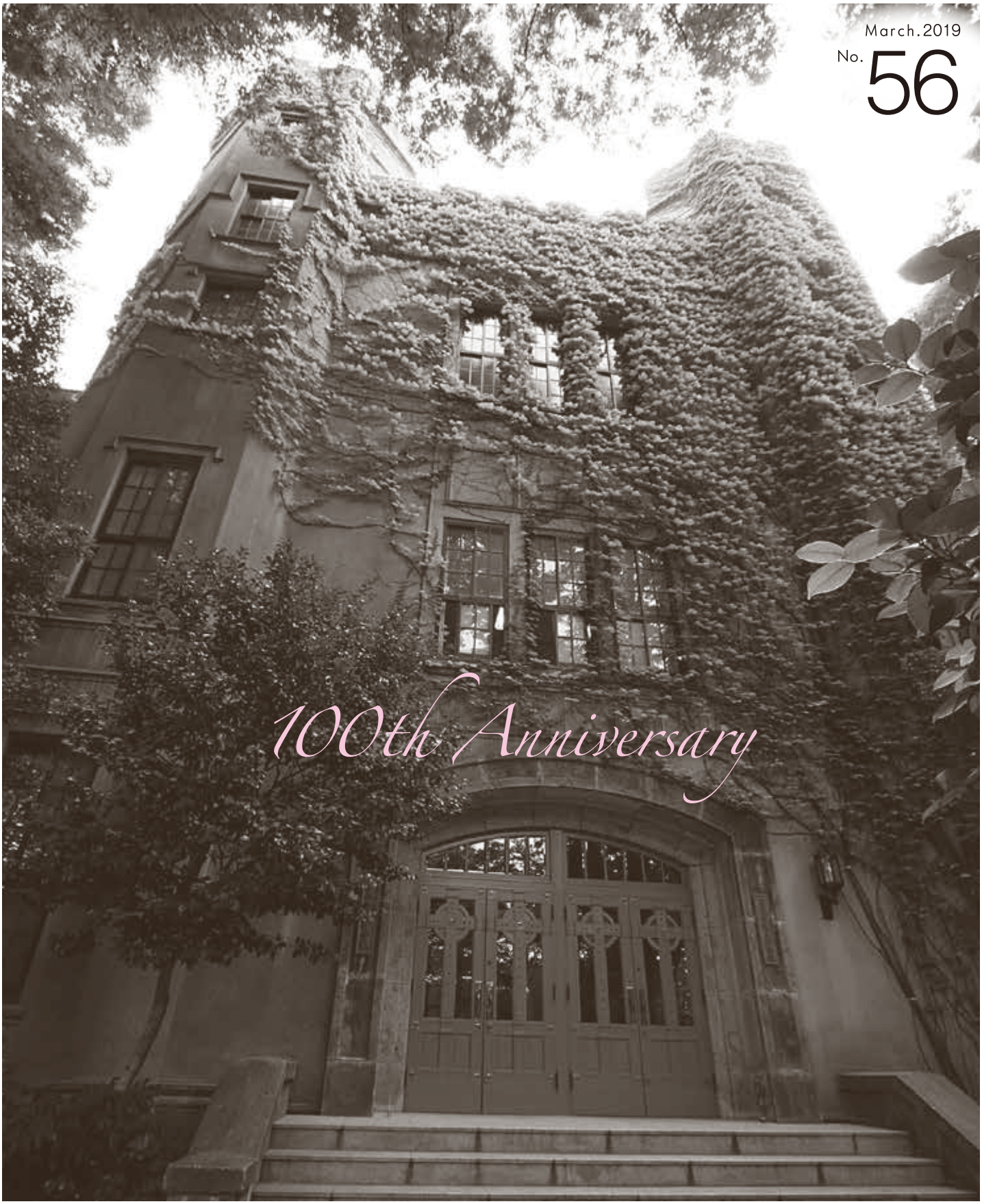
OLIVE-SPIRIT

関東学院学報 オリーブ・スピリッツ

March.2019
No.56



関東学院中学校高等学校は百周年を迎え、新たな歩みへ
「人になれ 奉仕せよ」を指針に未来へ向かう教育を探求し続けます。

県内初の男子のためのキリスト教系学校として誕生

関東学院には3つの源流があります。第一は1884年に横浜・山手に創立された横浜バプテスト神学校、第二は1895年に東京・築地に建てられた東京中学院です。東京中学院はのちに牛込に移転し、大学の前身となる高等部を併設して東京学院となりますが、さらなる教育の発展を目指して閉校され、横浜・三春台に新たに学校を設立しました。1919年1月27日、横浜市開港記念会館で設立披露会を行った『私立中学関東学院』が第三の源流であり、関東学院中学校高等学校の起源です。その歩みを冨山隆校長にうかがいました。

「開校にあたり、陸軍演習場だった土地の払い下げを斡旋してくださったのが、当時の有吉忠一神奈川県知事です。彼はクリスチャン知事で、横浜でキリスト教に基づく道徳心を持った商業人を育てたいと考え、開校を後押ししてくれたのです」

アメリカ・バプテスト・ミッションの多大なる支援のもとで、県内初のキリスト教系男子校として歩み始めた関東学院。第一回入学式で初代院長の坂田祐先生が学生達に贈った式辞、「人になれ」と「奉仕せよ」はひとつとなり、全学院において現在も校訓として継承されています。

困難や圧力に屈せず信念を貫いた先人達

百年の歴史の中でも、開校から太平洋戦争終戦までの約30年は苦難の連続でした。

「開校からわずか4年後に関東大震災で校舎が損壊しました。1929年にJ・H・モーガンの設計によって再建された旧本館は、1992年に横浜市歴史的建造物に認定されましたが、老朽化が著しく2016年に解体されました。今後、外観を復元した新校舎を建築する予定です」

戦時下の日本では、県内のキリスト教系学校も存続の危機に直面します。そんな中でも教育を続けられたのは、何度も陳情に赴いた坂田先生をはじめとする先人達の努力があったからです。

「1920年から39年まで本校に在職したアメリカ人宣教師J・H・コベルは絶対非戦主義者でした。軍事教練を受け入れつつ、礼拝の時間を確保して学校を存続させたいと考える坂田先生と、キリストの教えと平和を追求すべきと主張するコベル先生とで意見が対立したという記録も残っています。戦争に翻弄されながら、キリスト教系学校の灯を消さぬために葛藤し続けた時代だったのではないでしょうか」

戦後は、1947年に新制中学校の設立を機に男女共学となり、さらに翌年、新制高等学校を設立。地元横浜の優秀な子女が多く入学し、のびのびとした環境で自由闊達な学びを実践してきました。

先取の精神に溢れた伸びやかな学びを実践

横浜は様々な「もののはじめ」に溢れていますが、関東学院も例外ではありません。

「新しいものを取り入れることが好きな学校でしたし、当時はそれがおしゃれという気風もあったのでしょう。例えばマーチングバンドは、当時の広岡徹也先生が、米軍兵が歌いながら隊列を作る姿に感激して、アメリカに行ってノウハウを修得し、本校で指導したのが始まりです。また、日本では横浜が発祥と言われるバドミントンは、どこよりも早く1948年に部活動を開始し、インターハイの第一回と第二回大会で優勝しています。昨年は50年以上ぶりに男子団体で関東大会出場を果たし、OB達も大変喜んでいました」

関東学院中学校高等学校　校長
冨山 隆

青山学院大学卒業後、1978年関東学院中学校高等学校に国語科教諭として着任。以来、40年以上に渡って生徒の指導に尽力。2003年同校校長に就任。

1960年代のキャンパス風景

昔も今も英語教育とキリスト教教育を強みに

先進的な英語教育は開校当時からの伝統です。第一回の生徒募集要項では、当時は珍しい外国人宣教師による授業や、他校よりも英語の時間が多いことを謳っています。

「現在は中1から高2の5学年で週2回のベルリッツ・メソッドを導入するなど、厚みのある英語教育を展開しています。これからは国内にも優秀な外国人が増えてくるので、英語を道具として使える自信を持って卒業させたいですね」

身につけた力を社会で役立てるためにバックボーンとなるのがキリスト教教育です。

「先が見通せない時代だからこそ、普遍的な価値観に根ざした教育を大切にしたいと考えています。『人になれ 奉仕せよ』という校訓は、在学中は意味がよくわからないかもしれません。しかし、卒業して大学生や社会人になると理解できるのです。実際に卒業生と話をすると、他の人と共に働くことや、人と繋がることに意義を感じている人が多いですね」

百年前と同じ会場で式典を開催 将来は新校舎建築を計画

百周年を迎えた今年1月は様々な記念行事が催されました。1月26日には、卒業生で現在93歳の海老坪眞牧師による「百周年記念礼拝」を行いました。そして1月27日は、百年前の披露会と同じ横浜市開港記念会館で「百周年記念式典」を催し、黒岩祐治県知事からもご祝辞をいただきました。

同日夕方から神奈川県民ホールで開催した『百周年記念音楽会』では、本校が誇るマーチングバンド部、ハンドベル部、オーケストラ部、そしてプロ演奏家として活躍する卒業生が演奏し、約2千名の来場者をお迎えして素晴らしいひとときを過ごすことができました。

今後は、同窓会（橄欖会）による校歌碑の設置や、戦前からの歩みや現代の生徒達の姿をまとめた写真集を制作し、5月11日の記念祝賀会の引き出物として配布する予定です。そして2025年頃には旧本館の復元を兼ねた新校舎建築を計画しています。

「外観を忠実に復元し、塔の内部には同窓会館、3階の礼拝堂では結婚式などにも対応できることを検討しています」

偏差値偏重に傾きがちな今、伸びやかな校風を大切に、生徒の人間性が評価されるような教育を実践したいと語る冨山校長。時代時代で学校を築き守ってきた先人達の足跡を改めて見つめ、伝統と革新の教育を推進していきます。

略年表

1884年	横浜・山手に横浜バプテスト神学校（第1の源流）創立。
1895年	東京・築地に東京中学院（第2の源流）設立。（のち牛込に移転、1917年閉校）
1919年	横浜・三春台に中学関東学院（第3の源流）設立。入学式で初代院長坂田祐が「人になれ 奉仕せよ」を訓辞
1923年	関東大震災により全施設が損壊
1927年	財団法人関東学院を組織。関東学院中学部となる。
1946年	前年の横浜大空襲による被害のため、六浦に移転。
1947年	男女共学の新制中学校設立。
1948年	新制高等学校設立。
1949年	校舎再建により三春台に復帰。
2019年	1月27日、100周年を迎える。

今では貴重となった、校歌が刻まれた活版

校内外で活躍する3つの音楽系クラブの共演で聴衆を魅了した100周年記念音楽会

横浜市開港記念会館での100周年記念式典

学院全体で問題を共有し地に足のついた改革を
全学的な連携を強化し建学の精神の具現化を推進していきます。

今こそ大切にしたいキリスト教の普遍性

関東学院は、こども園から大学まで約1万5千人の在籍生を擁する総合学園であり、その根幹となるのは、世界の歴史を導いてきた聖書の思想に基づく人間教育です。坂田祐初代院長が語られた「人になれ 奉仕せよ」という校訓を、現代の日本社会の中でどう具現化させていくのか、私自身が舵取り役となり、教職員の皆さんと共に取り組んでいきたいと思っています。

かつて高度経済成長期以降、大学進学率が右肩上がりとなる中で関東学院も巨大化し、キリスト教を旗印にせずとも学生が集まる時代が続いたと思います。しかし90年代以降にバブルが崩壊し、さらに社会全体が縮小化や少子化に直面する現実において、私学をめぐる環境は大変厳しい状況にあります。そんな中で関東学院の教育の独自性とは何かを改めて考えれば、それはやはりキリスト教の精神と伝統に根差した教育に他なりません。学院全体でその方向性を共有して進んでいこうとしている今の時は、ある意味、キリスト教教育をこれまで以上に具体化させる大きなチャンスだと捉えています。

キリスト教学校と言っても、全教職員の中でクリスチャンは数％程度だと思いますし、子ども達も入学して初めて聖書に触れることがほとんどです。しかし、その普遍的な価値観は誰にとっても指針となるもので、キリスト者であるなしにかかわらず共有できるプログラムやアクティビティを、より一層充実させていきたいと考えています。

お互いを尊重しながら高め合っていける学院に

大学の横浜・関内キャンパス計画は、学院全体の命運に関わる大きなプロジェクトです。今後も規矩大義学長と十分にコンタクトを取りながら進めてまいります。多目的ホールでの礼拝や公開講座なども計画しており、キリスト教のエッセンスを何らかの形で地域に還元しながら、教育の可視化に努めたいと願っています。

学院内の連携の強化は、やはり大きな課題です。大学からこども園まで、今の体制を維持していくためにも、学院全体で意識をさらに高めていく必要があります。とはいえ、それぞれに伝統と特色がある中、学校同士の連携や人的交流などを前向きに検討することも大切であると考えます。その意味において、各校の校長、園長と話し合いの時を設けて信頼関係を築くことが、学院長として大事な仕事であると感じています。日本は縦社会で、時として人や組織がタコツボ化・孤立化しがちです。お互いの持っているものをインテグレート（統合）し、学院として力を高めていくためにも、他者を尊重して一緒に何かを作り上げるというキリスト教の精神に今一度立ち返って考えていかねばならないでしょう。

関東学院に着任して20年。理工学部教員、チャプレン、一時は野庭幼稚園（現のびのびのば園）の園長を兼任するなど、様々な角度から学院を見つめてきました。園児、児童、生徒、学生の成長を常に願いながら、学院の135年の歴史と伝統を大切に、地に足のついたキリスト教教育を実践したいと思います。

関東学院　学院長
松田 和憲

1975年から2015年まで多くの教会で牧師を務める。
1999年関東学院大学工学部着任、「キリスト教学」等を講じ、
大学宗教主任、学院宗教主任を務める。
2009年から2014年まで野庭幼稚園（2012年よりのびのびのば園）園長を兼任。
2018年12月21日付けで学院長就任。

都市開発に携わった経験を活かし横浜・関内キャンパス計画を牽引
横浜のまちづくりと学院の未来に繋げるプロジェクトに挑みます。

大学が街に溶け込み共に成長を目指す

横須賀市役所で都市部長として長年まちづくりに携わってきました。退職後は縁あって客員教授を務める一方、理事として横浜・関内キャンパス計画を進め、昨年10月25日付けで常務理事（企画担当）に選任されました。

学院では常務理事が企画、施設、財務、総務を担当していますが、私は主に横浜・関内キャンパス計画を担当しています。大学の新しい拠点作りに留まらず、これからの横浜のまちづくりの一翼を担うプレイヤーとして歩めることは、大きな責任を感じる一方、非常にわくわくとした思いでおります。

念願だった横浜市都心部進出が現実となった今、関東学院として関内の街をどうしていきたいのかを、しっかりと示していく必要があります。例えば、新キャンパスに隣接する大通り公園。交通の利便性が高いにもかかわらず、横浜市はほとんどイベント等に活用していません。そこで私達は進出を機に大きな仕掛けを計画し、関東学院が大通り公園を変えるという意気込みで取り組んでまいります。

また、周辺では横浜ユナイテッドアリーナ（仮称）やサブアリーナの建設、さらに横浜スタジアムを拠点とするＤｅＮＡベイスターズがスポーツタウン構想を進めています。若者が集う大学とはマッチングがしやすく、面白い連携が築けると期待しています。

横浜の新たな資源となる高度教育ゾーンの形成

私が挑戦したいことの一つが、新たな高度教育ゾーンの形成です。例えば京都には大学の街として有名なゾーンがあり、大学が地域の活性化に多大な役割を果たしています。翻って横浜にはそうしたゾーンがありません。そこで、市庁舎移転後の建物や物件を活用して、さらに大学や学生を増やしたいという構想を持っています。他の大学や地域企業とも連携を図り、多様な角度から可能性を模索したいと思います。

都市にとって人口がいかに大事なものか、私は身を以て経験しています。人口減少や少子化を迎えた今、私学としての未来を見据えて力を蓄えていくためには、単に都市部に進出するだけでなく、人の出入りを活性化させ、街自体の力を高めることが大切です。北千住などはその良い例でしょう。2022年4月に新キャンパスが始動しますが、本当に重要なのはそれからです。大学や学生を街にどう溶け込ませるか、それは大学側が負うべき責任に他なりません。若い教職員の皆さんを中心に、周囲と協力しながら常に大学が動いている姿を示してほしいと思います。

学院としては、中高と大学、あるいは幼小と中高の連携をより強く意識しなくてはいけないでしょう。大学はもちろん、中高以下の各校においても幼少期からの特色ある教育を一層推進していただきたいと思います。関内進出プロジェクトは、学院全体に大きな影響を及ぼすものであり、それを着実に成功へと導くことが私の使命だと思っています。

関東学院　常務理事（企画担当）
鈴木 正

横浜市出身。関東学院大学工学部卒業。
横須賀市役所で都市部長などを歴任。
2014年4月から大学同窓会（燦葉会）会長、
2014年10月から関東学院理事を務める。
2018年10月常務理事就任。

世界の立憲君主制の潮流から日本の天皇制のあり方を考察
関東学院大学国際文化学部の君塚直隆教授が
サントリー学芸賞〈政治・経済部門〉を受賞。

独創的で優れた研究者を顕彰
人文・社会科学の芥川賞

関東学院大学国際文化学部の君塚直隆教授が、著書『立憲君主制の現在 日本人は「象徴天皇」を維持できるか』（新潮選書）を中心とする、20年にわたる著作活動の業績により、第40回サントリー学芸賞（政治・経済部門）を受賞しました。

サントリー学芸賞は、サントリー文化財団が1979年に創設。広く社会と文化を考える独創的で優れた研究・評論活動を、著作を通じて行った個人に対して贈呈される賞で、「政治・経済」「芸術・文学」「社会・風俗」「思想・歴史」の4部門に分かれています。原則50歳以下を対象に、新進の研究者に光を当てることから、「人文・社会科学の芥川賞」と称されます。君塚教授はこれまで毎年のように候補に挙がっており、過去の著作も含めて広い支持を集めて待望の受賞となりました。

昨年12月10日にホテルニューオータニで行われた贈呈式では、5度目のノミネートでアカデミー主演女優賞を獲得した米女優シャーリー・マクレーンのスピーチにある「私の芸歴はこの賞と同じくらい長い」という言葉を引用して心境を表し、会場を沸かせました。

「2次会では、お世話になっている研究者や編集者が総勢60名ほど集まってくださいました。これまで私の本を担当してくれた編集者の方々にようやく恩返しができたという思いです。中には退職されて奈良から駆けつけてくださる方もいて嬉しかったですね」

第40回サントリー学芸賞贈呈式での受賞者達

贈呈式でスピーチをする君塚教授

歴史好きな少年を魅了した
イギリスの政治史や偉人達

日本におけるイギリス王室研究の第一人者として知られる君塚教授。小学生の頃から歴史が好きで、世界の偉人達の伝記シリーズを愛読していたそうです。

「中学1年生だった1980年、ユーゴスラビアのチトー大統領が死去しました。ヒトラーと戦った最後の男が亡くなったとか、葬儀に世界中の要人が集まったなど、新聞やニュースで大きく報道されていて、一体どんな人物なのだろうと気になり、ヨーロッパの歴史や政治家について調べるようになりました。中でも興味を引かれたのが、イギリスのチャーチルです。彼は自ら歴史書をたくさん書いていて、回顧録『第二次世界大戦』でノーベル文学賞を受賞しています。まるで歴史上の自分の立ち位置を確認して楽しんでいるかのようで、魅力を感じました」

大学でイギリス政治外交史を研究し始めた頃は、政治や外交を動かしているのは、首相や外交官といった人達だと考えていましたが、やがて「国王は君臨すれども統治せず」を原則とするイギリスにおいて、実際は国王が統治に深く関わっていることに気づいたそうです。

「君主制というものにもっと注目しなくてはいけないと思い、以来、王室や君主の今日的な意義や政治的な役割を探究し続けています」

統合の象徴として歩む
現代の君主制を分析

受賞対象の中心である著書『立憲君主制の現在 日本人は「象徴天皇」を維持できるか』は、立憲君主制の典型的な国家であるイギリスをはじめ、ヨーロッパの立憲君主制、さらに東南アジアや中東の君主制について、多くの事例を示して解説する一方、日本における戦後の「象徴天皇制」について世界史的な視野から考察しています。

例えば、政治家や官僚による一般的な外交を「ハードの外交」とするならば、王族や皇族による外交や国際親善は、いわば「ソフトの外交」であり、その役割は現代の国際政治においても重要であると君塚教授は指摘します。また、慈善活動はもちろん、現代社会の抱える課題に積極的に関わるなど、時代に合わせて変化する王室や君主のあり方にも注目しています。

「北欧やベネルクスなどは王室が率先してLGBTの権利保護に努めています。多文化共生においては、ノルウェーのハーラル5世が移民や外国人労働者に寛容な姿勢を示していますし、複雑な言語問題や民族問題を抱えるベルギー現代政治などは、まさに公正中立な国王の存在によって保たれていると言えます」

政治や社会、文化、宗教等において、多様な価値観を受け入れ、統合の象徴となりつつある現代の王室。イギリスをはじめ、ヨーロッパでは広報戦略に力を入れ、公務から日常生活まで、SNSを駆使して積極的に発信して存在意義を高めています。

「時代遅れと思われがちな君主制ですが、私が本書で強調しているのは、君主達こそが国民に寄り添い、時代と共に歩み続けているということです。政治や外交、社会にもたらす安定性や継続性。それが今日の君主制が持つ最も重要な要素だと思います」

イギリス王室の戦略と
日本の天皇制への示唆

本著では、こうしたイギリスをはじめとする王室の取り組みが、日本に示唆する部分が多くあるはずだとも訴えています。

「時代時代において、国民や世相がどんなものかを振り返る機会が必要ですし、日本もそうあってほしいと思います。広報戦略などは特にそう。若い人達に支持されるためにも、皇室に注目が集まっている今こそチャンスではないでしょうか」

日本はまもなく生前退位により、新しい天皇が即位され新たな時代を迎えます。戦後70年続いてきた象徴天皇制の将来、そして皇室の今後のあり方を考える上で、いい呼び水になってくれればと語ります。

【書籍情報】
立憲君主制の現在
～日本人は「象徴天皇」を維持できるか～
新潮選書　単行本（ソフトカバー）

関東学院大学 国際文化学部 比較文化学科 教授
君塚 直隆

1967年東京都生まれ。立教大学文学部史学科卒。
英・オクスフォード大学留学を経て、
1997年上智大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（史学）。
関東学院大学文学部教授等を経て、
2015年より国際文化学部比較文化学科教授。
英国王室研究の第一人者としてメディア出演、および著書多数。

世界が抱える問題解決と共生社会の持続的発展に貢献するために 関東学院大学は国連の開発目標「SDGs」を教育・研究活動に積極的に活用していきます。

関東学院大学　副学長　経営学部　教授
小山 嚴也（よしなり）
1996年一橋大学大学院
商学研究科博士後期課程単位修得退学。
2001年関東学院大学着任。
2014年関東学院大学副学長に就任。

身近な課題への取り組みが世界の課題の解決に繋がる

SDGsは、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の核となる国際的な開発目標で、17の目標と169のターゲットで構成されています。日本もこれに参加し、安倍晋三首相が自ら推進本部長を務め、国を挙げて推進しています。現在、公的機関だけでなく、企業や研究・教育機関など様々なセクターにおいてその活用が進んでいます。

SDGsについて、私は非常によくできた仕組みだと思っています。例えば「貧困や飢餓のない世界を作ろう」と言っても、実際に何をすればいいのかわからず、具体的なアクションに繋がらないことが多いと思います。一方、SDGsはその旗印の下、個人や団体が目の前の課題に取り組めば、最終的にそれが合算されて目標が達成されるという構造になっています。そして17の目標は、社会開発、経済成長、環境保全など全世界が直面する課題を網羅する形で分類され、世界共通のカラフルなアイコンによって視覚的に整理されています。このアイコンを見ただけで、自分の研究や行動が何と繋がっているのかを直感的に理解できるわけです。

社会連携教育のツールとしてSDGsがもたらす効果

「誰一人取り残さない持続可能で多様性と包括性のある社会の実現」というSDGsの理念は、関東学院大学の建学の精神と、その方向性が完全に合致しています。そこで関東学院大学は、教育・研究活動においてSDGsを活用し、「共生社会の創造と持続的発展」に貢献すると共に、あらゆるプロジェクトにおいて17のアイコンを使って関連性を明示し発信していきます。

関東学院大学は今、社会連携教育に力を入れており、学生達は様々な課題と向き合っています。例えば、2016年から経営学部の学生が三浦半島の食材を集めて販売する「K-bizマルシェ」で見てみると、〈8：働きがいも経済成長も〉〈14：海の豊かさを守ろう〉〈15：陸の豊かさも守ろう〉などの目標と関連づけることができます。経済学部では「フェアトレード」をテーマとした授業や取り組みを行っていますが、これはまさに〈1：貧困をなくそう〉〈4：質の高い教育をみんなに〉〈10：人や国の不平等をなくそう〉といった目標と合致します。自分の活動がどのアイコン（目標）と繋がるかを考えることで、実はそれが世界全体の抱える大きな問題の解決の一翼を担っていることが理解でき、学生の視野が空間的にも時間的にも広がっていくでしょう。

学生と生産者が繋がり共に成長する「K-bizマルシェ」

さらに、これの良い点は、同じ番号を掲げている人や組織が連携を取り合えることです。思いもよらなかったコラボが生まれる可能性もあり、その意味でも社会連携教育にぴったりのツールだと考えています。

もちろん、研究者にとっても意義のあるものです。研究とは社会的営みであり、その成果は社会に還元されてこそ意味を成します。ともすれば、狭い世界に籠りがちな私達研究者にとって、自分の研究と社会との結びつきを改めて自覚する意味でも、17のアイコンは有効と言えます。

今後は、私達がこれまで築いてきたプロジェクトや研究において、今あるものの延長線として、あるいは再構築するための指針として、SDGsを活用したいと思っています。そのためにも全学的な浸透を図り、アイコン活用のルールや広報の方法、管理する組織の整備等を進めていきます。

小山ゼミの学生が市内の高校生を指導する研究授業でも今年度 SDGs をテーマにした

SDGs未来都市・横浜とより一層の連携を目指す

横浜市は昨年6月、その達成に向けて特に優れた取り組みを推進する都市として、内閣府から「SDGs未来都市」および「自治体SDGsモデル事業」に選定されました。また、SDGsデザインセンターを創設し、行政・市民・企業・大学等を繋げ、環境・経済・社会的課題の同時解決型「都市モデル」を創出する構想を進めています。私達は横浜市にある大学として、より強固な連携の構築に努めていきます。

一方で、日本でのSDGsの認知度はまだ低く、昨年の調査では10％程度にとどまっています。しかし、2019年は政府が一回目のフォローアップを行う年であり、各方面で発信を強化して急速に認知度が上がることが予想されます。私自身も昨年、SDGsをテーマに市内のフォーラムで講演したり、高大連携授業を実施しましたが、徐々に関心が高まっていることを実感しています。

若者を中心とした社会全体に、課題解決への貢献意識が浸透することで、個人の消費行動や企業のビジネスモデルも変わっていくことでしょう。関東学院大学はそうした流れをしっかりと掴み、より良い未来を目指して、教育や研究を活性化させていきたいと思います。

SDGsとは？

Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）の略称で、「エス・ディー・ジーズ」と読みます。2001年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として、2015年9月の国連サミットで満場一致で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された国際開発目標です。2030年を年限とし、「地球上の誰一人置き去りにしない」を理念に、個人の暮らしから、社会問題、経済活動、地球環境に至るまで「持続可能で多様性と包摂性のある世界」を実現するための17のゴールと169のターゲットで構成されています。

1. 貧困をなくそう
あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ

2. 飢餓をゼロに
飢餓に終止符を打ち、食料の安定確保と栄養状態の改善を達成するとともに、持続可能な農業を推進する

3. すべての人に健康と福祉を
あらゆる年齢のすべての人の健康的な生活を確保し、福祉を推進する

4. 質の高い教育をみんなに
すべての人に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する

5. ジェンダー平等を実現しよう
ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る

6. 安全な水とトイレを世界中に
すべての人に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する

7. エネルギーをみんなに そしてクリーンに
すべての人に手ごろで信頼でき、持続可能かつ近代的なエネルギーへのアクセスを確保する

8. 働きがいも経済成長も
すべての人のための持続的、包摂的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用およびディーセント・ワーク（働きがいのある人間らしい仕事）を推進する

9. 産業と技術革新の基盤をつくろう
強靭なインフラを整備し、包摂的で持続可能な産業化を推進するとともに、技術革新の拡大を図る

10. 人や国の不平等をなくそう
国内および国家間の格差を是正する

11. 住み続けられるまちづくりを
都市と人間の居住地を包摂的、安全、強靭かつ持続可能にする

12. つくる責任 つかう責任
持続可能な消費と生産のパターンを確保する

13. 気候変動に具体的な対策を
気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る

14. 海の豊かさを守ろう
海洋と海洋資源を持続可能な開発に向けて保全し、持続可能な形で利用する

15. 陸の豊かさも守ろう
陸上生態系の保護、回復および持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地劣化の阻止および逆転、ならびに生物多様性損失の阻止を図る

16. 平和と公正をすべての人に
持続可能な開発に向けて平和で包摂的な社会を推進し、すべての人に司法へのアクセスを提供するとともに、あらゆるレベルにおいて効果的で責任ある包摂的な制度を構築する

17. パートナーシップで目標を達成しよう
持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
世界を変えるための17の目標

関東学院六浦中学校・高等学校の生徒が国内外で快挙を達成
鉄道研究部が全国鉄道模型コンテストで最優秀賞
国際コンベンションで3位に入賞しました。

鉄道模型の甲子園を勝ち抜き 日本代表としてドイツへ遠征

関東学院六浦中学校・高等学校の鉄道研究部は、昨年8月4日・5日に東京ビッグサイト（東京都江東区）で開催された「第10回全国高等学校鉄道模型コンテスト」に出展。137校がエントリーした「モジュール部門」で文部科学大臣賞（最優秀賞）を受賞しました。第1回・第2回大会以来、7年ぶり3度目の受賞となります。

さらに11月にはドイツのシュトゥットガルトで行われた鉄道ジオラマ大会「第13回ヨーロピアンNスケールコンベンション」に日本代表として出場。世界各国25団体が集まる中、見事第3位に選出されました。こうした活躍が評価され、今年1月には金沢区民栄誉賞を受賞しています。

10人の生徒が協力して 夏の京都を表現

「全国高等学校鉄道模型コンテスト」は鉄道模型の甲子園とも言われ、指定された規格の中にジオラマを制作し、そのレイアウトや出来栄えを競う大会。なかでも「モジュール部門」は最も参加校の多い部門です。関東学院六浦の作品テーマは「和の街～京の風物詩～」。メンバーは中3から高2までの10人の生徒です。

「テーマが決まるまで3か月以上話し合いました。日本らしい風景を作りたくて、川床やお祭りなど京都の夏の風物詩を表現することに決めました」（部長の林田友佑さん・高2）

鴨川沿いの風景や京の街並みを表現

制作期間は約4か月。京阪本線の伏見稲荷駅の駅舎、寺院でのお祭りの賑わい、鴨川沿いに建ち並ぶ川床、古い木造家屋や細い路地、納涼を楽しむ人々など、夏の京都の風景を30cm×90cmの直線モジュール（ボード）に凝縮して再現しました。

駅や鉄橋などは、紙や竹串を利用して自作。河原の石垣は、拾ってきた小石をカットして使用しました。家屋など既製品を使用する際には、塗装で汚れや風化を表現する「ウェザリング」という技法で、古風な街並みを再現。建物内や街灯には豆電球を仕込み、幻想的な古都の情景を演出しました。

部長の林田さんは、川の水面や石垣、そして電飾の配線を担当。生田目賢太さん（高2）は、線路上の架線や架線柱など、細かい作業でリアリティを追求しました。杉山僚さん（高1）は、寺院にある日本庭園を作り、和の風情を盛り上げています。橋や川を担当した皆川智彦さん（高1）は、水の色の濃淡により水深の変化まで表現し、景勝地の鴨川を作り上げました。小暮信嘉さん（高1）は道路や建物を担当し、道路と歩道の段差にまでこだわって作り込みました。そして駅舎を担当した荒居千裕さん（中3）は、実際に現地に行き、自分の目で細かい部分を確認して創作に生かしました。

ぎりぎりまで粘って、完成したのは前日の夜。その努力が実を結び、最優秀賞を受賞しました。「審査員の方からはテーマ性や華やかさを評価していただき、すごく嬉しかったです」（林田さん）

英語でのプレゼンにも挑戦 日本らしさを伝え世界3位に

ドイツで開催された「ヨーロピアンNスケールコンベンション」は11月22日から25日の4日間。現地では英語でのプレゼンテーションにも挑戦しました。出発前にはネイティブの先生が熱心に原稿や発音をチェックしてくれ、本番では最初こそ緊張したもの、明るく堂々と日本らしさをアピールできました。日頃の英語教育の成果を発揮して、来場者からの質問にも臨機応変に応対できたそうです。また、欧米各国の作品を見て、ゆったりとダイナミックな構図や、様々なギミック（動的な仕掛け）など、多くの刺激を受けました。

日本一となりドイツでも大健闘した鉄道研究部・模型班の代表メンバー
後列左から生田目賢太さん（高２）、林田友佑部長（高２）、杉山僚さん（高１）、顧問の高石智一教諭
前列左から皆川智彦さん（高１）、小暮信嘉さん（高１）、荒居千裕さん（中３）

大人も参加する大会で、彼らは唯一の中高生チームで最年少。そんな中で3位という素晴らしい成績を収めました。ドイツにも同行された顧問の高石智一教諭に、鉄道研究部の活動についてお聞きしました。

「鉄道研究部は、ジオラマを制作する模型班と、人が乗れるミニトレインを制作する乗用班、クリエイティブな発想で情報発信する企画デザイン班の3チームで活動しています。校外でのイベントを年間20回以上行い、来場者へのサービスを通じて社会性も身につけています。今回優勝したチームは、人数が多い上にチームワークが良く、皆で話し合いながら創作を進め、一つの作品に集約した結果が受賞に繋がったと思います」

イベントや作品展示に関する最新情報は学校や鉄道研究部のサイトでご確認ください。今年の大会の準備は既に始まっています。優勝メンバーが4人も残り、「昨年以上のものを作りたい」と意欲を見せます。2連覇を目指して、頑張れ、鉄道研究部！

最年少チームだった世界大会では多くの人々と交流

学びを育む 素晴らしい教育コンテンツ

鉄道模型コンテストでは、既製品に頼らず、材料探しから始めて、様々な工夫を凝らし、ゼロからパーツを創作していきます。そこには柔軟な想像力が必要です。ある学校は〝つけまつげ〟に色を塗って並べて〝棚田〟を表現していましたが、そうした発想には驚くばかりです。各校レベルが高い中、本校は京都の魅力を集めたダイジェスト的な街並みを作りました。その発想や材料の活用、デザインがとても面白く、高い評価をいただきました。何度も仲間と話し合い、互いの知識と経験をぶつけ合わせて新しいものを生み出す、そのプロセスこそ今求められる教育の一つの形だと思います。

関東学院六浦中学校・高等学校 校長
黒畑 勝男

集中して細かい作業に打ち込む

個人戦で「全国高等学校将棋竜王戦」出場、団体戦でも県内上位に進出
躍進著しい中高将棋部、目指すは全国大会入賞！

昨年8月20日・21日に福岡市で開催された「第31回全国高等学校将棋竜王戦」（主催：読売新聞社、日本将棋連盟）に、関東学院高等学校2年生の永田麟太郎さんが出場しました。永田さんは同年6月に247名が参加した神奈川県予選で見事に優勝。羽生善治竜王（当時）が大会審判長を務め、各都道府県代表52名が参加した全国大会では、予選リーグを突破して決勝トーナメントに進出するなど健闘しました。

「決勝トーナメントは残念ながら初戦で敗れましたが、予選リーグでは大会優勝者と対戦して良い勝負ができ、すごく手応えを感じました」

対局に集中する永田さん

神奈川県大会で優勝して表彰状とトロフィーを受け取る永田さん

ゲーム少年だった永田さんが将棋を始めたのは、小学5年の時です。ゲーム機が壊れ、暇を持て余してお父さんに将棋道場へ連れて行ってもらったことをきっかけに、その魅力に目覚めたそうです。

「将棋には戦略性があり、ゲームと違ってクリアがありません。ひたすら極めていける面白さがあります」

関東学院に入学したのも「将棋部がある学校だから」というほどのめり込み、中学3年の時に「全国中学校選抜将棋選手権」の県予選で優勝して全国大会に進出するなど、めきめきと力をつけました。そんな永田さんに、自らの棋風を尋ねてみました。

「不利になっても粘り続けて勝つことが多いですね。あまり局面を悲観せず、じっと耐えて、カウンターを仕掛けます。一手でも間違えると負けてしまうので、スリル感が味わえます」

他にも永田さんは昨年、12校190名が参加した夏季合同合宿（全国最大規模）で最上位のS級戦に優勝。11月には「第30回神奈川県高等学校総合文化祭将棋大会」のA級戦で準優勝し、今年1月岡山県で行われた全国新人大会に出場するなど、着実に全国トップレベルに近づいています。

将棋部としても、この1年は躍進の年でした。他の5人の高校部員も全員が県大会A級に昇級。また、県大会団体戦（3人制）では一昨年から準優勝または3位と好成績が続いており、全国きっての激戦区の神奈川県で一番伸びている将棋部の一つと言われています。

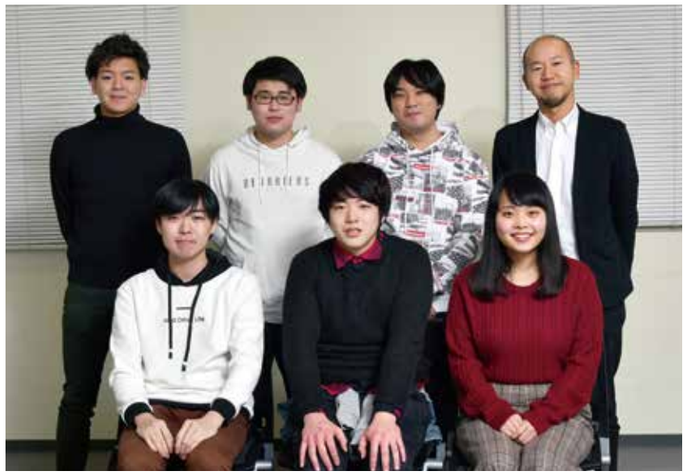
現在、部長として将棋部を引っ張る永田さん。高校最後の年は「個人戦では全国大会入賞、団体戦でも全国大会出場」と目標を掲げます。この春には、永田さんに憧れて関東学院小学校から有望な新入生も入学します。今後も目が離せない将棋部、さらなる活躍に期待しています。

関東学院中学校高等学校 将棋部部長
永田 麟太郎 さん（高2）

将棋を始めてまだ7年。
いまや県内屈指の高校生棋士に成長しました。
「将棋はずっと続けていくつもりです。
将来はアマチュアでのトップを
目指して、プロの棋戦に出ることが目標です」

K-biz×崎陽軒×横浜ウォーカーによる手みやげプロジェクト
経営学科の学生が企画した「お菓子」新発売。

経営学部が社会連携プラットフォーム「K-biz」の一環として、崎陽軒と横浜ウォーカーとコラボして、新たな横浜名物を開発しています。崎陽軒の創業110周年・シウマイ誕生90周年を記念して、経営学科の学生達が新しい「手みやげ」を企画。発売までのプロセスを、雑誌「横浜ウォーカー」が密着取材して誌面やウェブで紹介しています。


後列左から山田翔太さん、松浦孝輝さん、伊藤直人さん、真保智行准教授
前列左から安藤友哉さん、リーダーの岡野秀麻さん、瀧沢麻依さん

「横浜で長く親しまれるお菓子」「もちっとした食感」といった崎陽軒からの要望を元に学生達が様々なアイデアを考案。書類審査を通った4チームが昨年8月の最終プレゼンテーションに進みました。選ばれたのは、横浜の歴史を象徴する「ガス灯」をモチーフに、やわらかな色合いの求肥でコンフィチュールを包んだお菓子「横濱の灯り」を提案した、真保智行准教授のゼミナールのグループです。

学生達は崎陽軒とミーティングを重ね、試作品を試食し、商品内容の調整・改良を進めました。商品は、あんず、ラズベリー、レモンという見た目も可愛い3色のフレーバーが楽しめるお菓子。日持ち等を考慮し、小麦粉で焼き上げたもちっと食感の生地で、甘酸っぱいフルーツジャムを包みました。球体を保つため、生地とジャムの間には白餡を入れています。半透明のふたからお菓子が透けて見える包装は、ガス灯のイメージとぴったりで、若い女性を中心にSNSによる拡散にも期待しています。

パッケージデザイン案
今後の進捗は以下のHPで
https://sp.walkerplus.com/kgukiyoken/

学生達からは「様々な制約がある中、企業の資源を活用してアイデアを商品にしていく過程が勉強になった」「就活に向けて自信になった」など達成感あふれる声が聞かれました。新商品は横浜や東京近辺の崎陽軒各店舗で4月下旬頃からの販売を目指して開発中です。学生達が作った新しい横浜の手みやげをぜひ味わってください。

株式会社崎陽軒 広報担当者のコメント

関東学院大学とのコラボによる商品開発は、関東学院の創立125周年の時以来、今回が2度目となります。学生のフレッシュなアイデアは、企業に様々な気づきを与えてくれますし、一緒に横浜の新名物を作ることで、街全体を活気づけたいとの思いがあります。皆さんとは何度もミーティングを重ね、お互いにやりたいことを言い合える対等な関係で仕事を進められていると思います。皆さんの自由な発想を元に、私達のものづくりのノウハウや知識を融合させて、今までにない商品になっています。メインターゲットである若い女性はもちろん、幅広いお客様に手に取っていただき、横浜で長く愛される商品に育てていきたいと思います。

関東学院ネットワーク

関東学院の卒業生にゆかりのあるお店を訪ねるコーナー。
今回は誰もが心踊る懐かしい洋食の名店をご紹介します。

米国風洋食「センターグリル」

住所／横浜市中区花咲町1-9
☎／045-241-7327
［営業時間］11:00〜21:30（21:00ラストオーダー）
［定休日］月曜
［アクセス］桜木町駅・日ノ出町駅 徒歩5分
馬車道駅 徒歩7分
※ランチメニューは終日提供しています。

弟で三代目店主の石橋正樹さんと、姉の山本美樹さん

ケチャップで作る ナポリタン発祥の店

野毛・柳通りにある「センターグリル」は、戦後間もない昭和21年創業の老舗の洋食屋さん。関東学院の卒業生である山本美樹（旧姓石橋）さんのご実家です。

「私は中高を三春台で過ごし、大学では経営を専攻しました。結婚した現在も黄金町に住んでいるので、朝夕には母校の鐘の音が聴こえてきます」

創業者である祖父の石橋豊吉さんは、旧横浜居留地にあったセンターホテルで働いたのち、野毛に「センターグリル」を開店しました。以来、町の洋食屋さんとして愛され今年で73年。現在は三代目となる弟の石橋正樹さんがお店を切り盛りしています。

人気メニューは「ナポリタン」（税込720円）。もちもちとした太麺と濃厚なケチャップの味が絶品です。実は、ケチャップを使ったナポリタンを最初に提供したのはセンターグリルだと言われています。正樹さん曰く「ナポリタンの元祖であるホテルニューグランドは、生のトマトを使ってソースを作っています。それを祖父が、もっと気軽に美味しいものをお腹いっぱい食べてもらおうと、ケチャップを使ったのが始まりです」。他にも、オムライスにチキンカツとサラダを盛り合わせた「浜ランチ」（同1050円）など、手頃な価格でボリューム満点のランチメニューが豊富です。

レトロでぬくもりある店内は、昨年2月に増築して席数も倍増。昔懐かしい洋食の味を求めて、地元はもちろん、遠方からも多くのお客さんが来店します。なかには親子三代で通われる常連さんもいらっしゃるそうです。新しい店舗が増え、雰囲気も変わりつつある野毛界隈ですが、センターグリル は創業100年を目指して、これからも変わらぬ味を届け続けていきます。

▼ 青いシェードが目印。左側が昨年増築した店舗

開店当初からの
看板メニュー
「ナポリタン」

これぞ洋食！
という組み合わせの
「浜ランチ」

広報から

1919年、横浜・三春台に「私立中学関東学院」が設立されました。今年100周年を迎えた関東学院中学校高等学校の起源です。第1回入学式で坂田祐院長は、「人になれ」「奉仕せよ」と力説し、これを学院教育のモットーとすると宣言しました。この訓辞は100年の時を経た今も、学院の校訓「人になれ 奉仕せよ」として継承されています。

設立当初より、人格の形成に重きをおくこと、そしてキリスト教主義に従って教育することを教育方針としてきた関東学院。学院を取り巻く環境が大きく変化していくなかで、各校では高度な専門知識と技術の習得を目指した教育・研究を実践するとともに、人格を磨き、人のため、社会のために貢献できる人を育てるキリスト教主義に基づいた人間教育にも力を入れています。

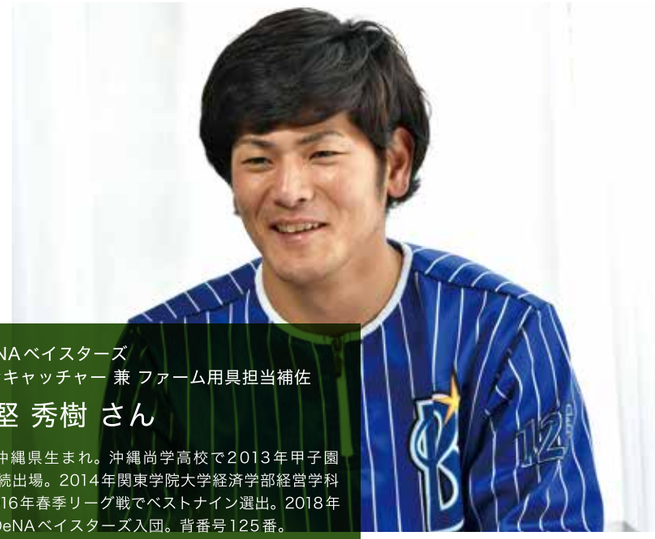
さらに関東学院では、企業や自治体、地域と共に社会の課題解決に取り組む社会連携教育を推進しています。SDGs（持続可能な開発目標）を活用したプログラムによって、自分の学びが、世界が抱える大きな問題の解決にどうつながるかを意識する。あるいは学校教育の場で、実社会での課題発見・解決にチャレンジする。それらの体験を経ることで、自分に足りない知識や能力に気づき、より広く深い知識を求め、多様な視点から教育・研究に取り組むことができます。これからの関東学院のさらなる挑戦にご期待ください。

関東学院大学 広報課　(045) 786-7049 / kouhou@kanto-gakuin.ac.jp

・編集：関東学院大学 広報課　・写真：藤間 久子、森 日出夫（アマノスタジオ）　・文章：坂尾 基子　・デザイン：髙橋 稔、竹本 真実（株式会社CCN）

ブルペンキャッチャーという仕事と出会い、新たな野球人生を歩む
裏方として選手を支えられることがうれしい。

昨年1月から横浜DeNAベイスターズ（以下ベイスターズ）でブルペンキャッチャーを務めている具志堅秀樹さんは、関東学院大学硬式野球部出身です。主に横須賀市にある総合練習場で活動しています。



横浜DeNAベイスターズ
ブルペンキャッチャー 兼 ファーム用具担当補佐
具志堅 秀樹 さん

1995年沖縄県生まれ。沖縄尚学高校で2013年甲子園に春夏連続出場。2014年関東学院大学経済学部経営学科入学。2016年春季リーグ戦でベストナイン選出。2018年1月横浜DeNAベイスターズ入団。背番号125番。

ブルペンキャッチャーとは、ブルペンで投手の球を受ける捕手のこと。ウォーミングアップや練習をサポートするなど、裏方としてチームや選手を支えます。

「他にもバッティングピッチャーや球拾い、道具の準備など様々な仕事をします。オフシーズンは選手の自主トレを手伝うことも多く、ほぼ毎日練習場に来ていますね」

実は、大学卒業後は地元沖縄の企業に就職して社会人野球を続ける予定でしたが、単位不足で卒業が半年延びたため断念。そんな時、関東学院大学OBで現在ベイスターズのスカウトを務めている河原隆一さん（93年度ドラフト1位入団）もアドバイスをくださるなど、力になってくれたそうです。

「プレイヤーとしての未練は全くありません。好きな野球、それもプロ野球に携わる仕事ができて幸せですし、とてもやり甲斐を感じています」

裏方として選手のために働く具志堅さん。大学時代は1年生からベンチに入り、正捕手として臨んだ3年生の春季リーグ戦ではベストナインに選出されています。

「大学時代は一度もベンチから外れたことがなかったので、裏方の経験がありませんでした。今の仕事を通して、当時ベンチに入れなかった人達がどれほど大切だったか、改めて思い知りました」

ベイスターズには沖縄出身で同い年の平良拳太郎選手や、高校の先輩である嶺井博希選手が所属していて、以前から応援していたそうです。今は練習を手伝った選手が試合で活躍してくれることが一番の喜びです。

大学3年の春季リーグ戦ではベスト9に選ばれた

「選手達も〝ありがとう〟と声を掛けてくれるので、うれしいですね。一人ひとりの要望に応えるためにも、もっとコミュニケーションを増やして、情報を収集したいと思っています」

2年目となる今シーズンは、ボールや道具の管理を行う用具担当補佐も兼任。一層のスキルアップを目指し、チームに貢献する具志堅さんにこれからも注目したいと思います。

選手の癖やリズムを理解することも大切な仕事

お知らせ

横浜・関内キャンパス開設にともなうご支援のお願い

関東学院大学の新たなチャレンジがスタートします。
2022年4月に、JR関内駅前に新キャンパスを開設。
ヒト・モノ・コトが集積する横浜市都心部に、新たな拠点を開設することで、
関東学院大学が取り組む「社会連携教育」をより推進していきます。
社会連携教育を推進することで、これからの時代で求められる、多様な人々と
協働しながら、新しい価値を生み出していく人材の育成をめざします。
また、新キャンパスでは、学生だけでなく企業・自治体・市民などに開かれた
教育プログラムを展開。社会に開かれたキャンパスとして、ホール、
コワーキングスペース、ブックカフェなどの施設の市民開放も予定しています。
関東学院大学では、新キャンパスを軸に、地域の新たな原動力となり、
大小様々なイノベーション拠点として、多様な機能を社会に提供していきます。
関東学院大学の新たなチャレンジに、
多くの皆様にお力添えをいただければ幸甚です。
新キャンパスの開設に向けた、
あたたかいご支援を賜りたく、お願い申し上げます。

寄付に関するお問合せ

学校法人関東学院　募金担当
236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
tel 045-786-2685　fax 045-786-5729
bokin@kanto-gakuin.ac.jp

募集期間

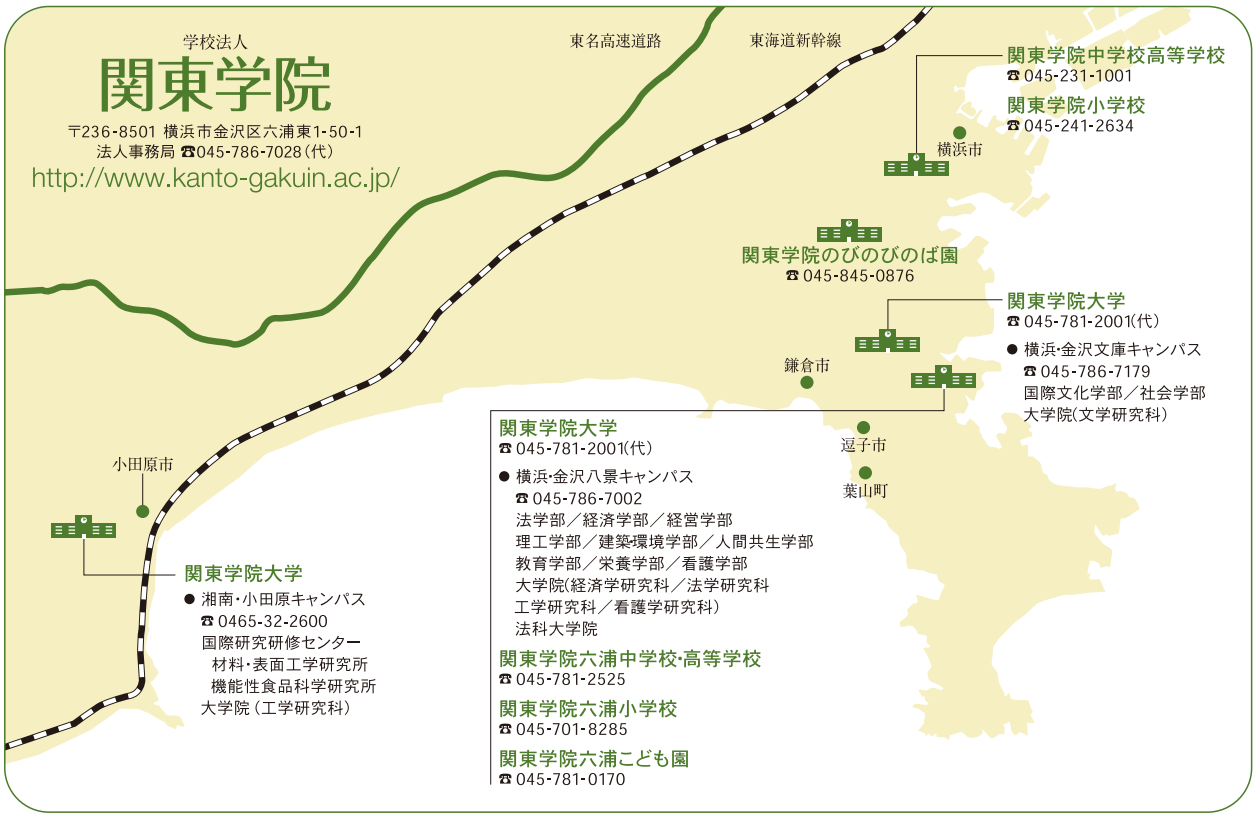
2019年4月～2022年3月
詳細は、2019年4月より学院サイト（http://www.kanto-gakuin.ac.jp/）でお知らせします。

顕彰銘板

10万円以上の寄付者には、キャンパス完成後に銘板へご芳名を記し、末永く顕彰いたします。

税制上の優遇処置について

学校法人関東学院に対する寄付は、特定公益増進法人への寄付金として、寄附金控除の措置を受けることができます。
※入学（園）された年内に新入生保護者および新入生が寄付をされた場合は、
「入学に係る寄付金」とみなされて寄附金控除の対象になりませんので、ご留意ください。



関東学院学報 第56号 2019年3月1日
発行・関東学院　編集：関東学院大学広報課